

久米正雄

永久の青年

— 夏目漱石氏 —



永久の青年——夏目漱石氏——



漱石先生に初めて会った時、壮年時代の、書棚を前にして、髭をぴんと刎はねかした写真に、強い印象を作っていた自分の眼は、先生も齡を取られたなと思った。実際先生の顔は、五十にしては老ふけ過ぎている。併し話を窺っている中に、吾々は直ぐこの割合に老けた先生の顔の中に、「永久の青年」の輝きを見出す。それが燦きらきら々と閃ひらめき出る時、先生と自分たちとの間には、不思議に年齢の溝渠こうきよがなくなる。——自分は屢々しばしばこの事を経験した。

先生の顔は、先生も何かの中に書かれた通り、あごひげ頤髯を生やすと釣合の取れるように、額の広い顔である。しか而してその上を、少しの白髪はあつてもまだ黒いつやつや艶々した一、二寸程の髪が、撫でつけたか撫でつけない程度で、落着よく分けられてある。鼻の下のじよきとはさ剪んだ口髭は、頭髮よりもずっと白を交えて、既に半白と云う位いになつている。その短い口髭の蔽うた下で、先生は唇の開閉が余り激しくない、口籠ったような物言いをされる。それから小鼻に表情があつて、笑つたりなぞする時、それはいじ窘められるようにちよつと鳥渡動く。しか併しなが乍らなかんずく就中先生の顔

の特色をなすものはあの眼である。この間ある骨相をやる人が来て、先生の白眼が黒眼へ流れ込むような相のあるのを大変吉相だと見て云ったそうであるが、先生は何か物を考えて云う時は、その眼を先ず斜に中空へ向ける。而してそれをじつと真っ直に對手へ落して、おもむ徐ろに話し出される。この時は実にいい眼附をされる。自分は幾度かこの時の先生の眼の理智と温情を交かたみに湛えた輝きを経験した。

先生の全体の顔色は、浅黒いと云った方の、沈んだ光沢を持っている。徳田秋声氏もこの顔色の所有者である。

見ている中に落着いて、静かに大作をしたくなるような顔色である。

先生は多くの場合、懐ろ手をし乍ら、端坐して居られる。而してあらゆる人に平等な態度を取られる。自分は先生の処へ行き初めた頃、それがとりわけて嬉しかった。

（『文章倶楽部』 大正六年一月）







日本文学電子図書館

---

永久の青年——夏目漱石氏——

著 者：久米正雄

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館